

島根県腎協 通院送迎事業の取組みについて

一月二十七日(日)十時より、「ビックハート出雲(島根県出雲市)で、島根県腎臓病患者連絡協議会(島根県腎協と略す)の役員研修会が開催されました。

研修の内容は島根でも、通院介護事業を行なうので「さわやか」の経験を学ぶというものでした。島根県腎協から「さわやか」に、研修の要請がありました。要請に応じて、「さわやか」から、江頭会長、山田・梶原の両コーディネーターが参加しました。島根県腎協の役員が二十六名出席しました。研修会は「通院介護を考える」という演題で、江頭会長が九十分の講義をしました。江頭会長は、最初に「なぜ今、通院介護か」について話しました。透析費用が一兆円を越えるいま、少しでも医療費を削減する必要がある。そのためには、社会的入院を減らし、通院治療をすることが大事であると述べました。

続いて、通院介護事業はどうすれば出来るかについて話しました。移送サービスは行政が行なうのが常道であるが、現実には、自らが事業を起し、行政より助成金をもらう方法がいいのでは…。通院事業には事務所コーディネーターの確保資金が必要である。設立するためには、行動を第一に、役員会で決定したことは、実行に移さないと、延ばし延ばしでは設立は難しいと強調しました。最後に、設立後の注意事項と補償問題について述べました。

講義のあと、質疑応答があり、数多くの質問や意見が出されました。通院介護事業を設立しようという熱意が感じられる研修会になりました。当面は、県庁所在地の松江市につくすることを稲田島根県腎協会長が表明していました。「さわやか」から三名が参加しましたが、前日は稲田会長が出雲大社を、当日は宍道湖を巡り松江市を案内していただきました。島根県腎協に通院介護事業が設立されることを祈りながら帰途に着きました。



江頭会長と島根県腎協の稲田会長

編集後記

二月三日は節分の日でした。広辞苑に「季節の移り変わる時、すなわち立春・立夏・立秋・立冬の前日の称。特に立春の前日の称。」



この日の夕暮、終(ひいらぎ)の枝に鯛の頭を刺したものを戸口に立て、鬼打豆と称して炒った大豆をまく習慣がある」と書かれていました。

地方によって巻き寿司を良方角に向け食べる習慣等、様々あるようですが、いずれも一家の無病息災を願うての行事でしょう。

「立春」と聞いただけで生命の息吹きを感じ、気持ちはいきいきしてきます。この日を節目に心の鬼も追っ払って、楽しく、有意義な一年にしていきましょう。



一月二六日、島根県腎協様より江頭会長へ通院送迎事業の取り組みについての講演依頼があり、会長とコーディネーターの山田さんと私と三名が神々のふるさと出雲市へと向かいました。

福岡を出る時から大雨に送られ雨と一緒に出雲市へ着いて大雨の歓迎でした。

空港には島根県腎協会長の稲田様が迎えてくださって、車中にて島根県の患者さんの実状や気候風土などについてお話を伺いながらせっかくだすからと出雲大社へと案内してくださいました。

高さが二十三メートルの日本一の大鳥居をくぐり玉砂利を踏みしめながら歩くと雨の冷たさとともに身が引き締まる思いでした。

国宝でもある大社造りの建築様式にはただただ感嘆の思いでした。

長さ八メートル、重さ千五百キロの大しめ縄の下で縁結びの神様をお願いをすることは何なのでしょう？

二礼・四拍手・一礼の参拝の仕方、年頃の娘をもつ母

として良縁をたのんでは来ましたが、ぎこちない仕草にて神様がお聞きくださったかどうか今後に期待しておきます。それから地元大社特産のぶどうを原料にしたワイン工場島根ワイナリーへと案内していただき、ワイン・ワイン・



ワインと七、八種類を試飲して『うくんおいしい』の言葉のみ、後はおみやげの袋でいっぱいになりました。

一夜明けて二七日は朝十時よりビッグハート出雲にて島根県腎協役員研修会の中で江頭会長の「通院介護を考える」の講演が始まりました。約二

十六名の役員様が集まっておられ、皆さん熱心に聞き入っておられました。

講演に続き質疑応答があり、コーディネーターの山田さんが回答しました。

ぜひ、北九州の実態もみていただき、何か役に立てれば幸だと思いましたが、ぜひ、お手伝いしたいと思えました。

全腎協大会を島根で実現され成功された経験を生かし、会長さんはじめ役員さんも大変熱心で協力的な方ばかりなので早い時期に通院事業が実現できると確信しました。

帰りの飛行機の時間まで少しあったので会長様が宍道湖と松江市内を案内して下さいました。松江城を見ながらお堀を回って一周四十五キロある宍道湖をドライブしてくださいました。宍道湖の夕日がすばらしい事を聞き、「絶対見に来るぞ!」と思えました。

島根県腎協の会長様をはじめ役員の方々、事務局の方、大変お世話になりました。全国にまたひとつ仲間が増えることを楽しみにしています。ありがとうございました。



出雲大社



画・おおば比呂司

縁結びの神福の神として、全国の人々に親しまれている出雲大社は「大国主神」をおまつりして、本殿は国宝になっており、日本で最も古い神社建築の形式をもった大社造りで、伊勢神宮の神明造りとともに代表的な神社建築です。正面の拝殿は昭和34年に再建された檜造りの美しい色艶と長さ8メートル、重さ1500キロの大しめなわが参拝者の目をひき、荘厳さに思わず気が引き締まります。

境内の松、杉などの枝によい縁が結ばれますようにとの願いを込めたおみくじが結ばれ、白い花が咲いたように見えます。また、この度平安後期ごろの本殿を支えた巨大な柱が発見され、古代出雲大社は東大寺仏殿をもしのぐ天空神殿であったとの言い伝えが、現実味をおびてきているようです。